

巻頭言

エチオピア、30年を振り返って

日本ナイル・エチオピア学会会長 重田眞義

2015年になって突然、これまで在東京エチオピア大使館で発給されていたビジネスビザが本国の入国管理局からの発給通知なしには入手できなくなった。この10年近く、毎年1年間有効の数次ビザをもらって気ままに行き来していたことに比べると不便きわまりない。領事と交渉しても、大使に依頼しても、彼らにはその権限がなくなったという。本国のコントロールが厳しくなった理由は定かではないが、憶測ではテロ対策を含め、外国人訪問者への管理を強化するためとのことらしい。

エチオピアに限ったことではないが、私たち研究者がアフリカの国々でフィールド調査をする場合の身分や滞在許可の確保には苦勞させられることが多い。かつて社会主義政権時代のエチオピアでは、ビザを切り替えて滞在許可をもらうのに数週間かかることはふつうであった。調査地まで国内を移動するのに旅行許可が必要だったし、車の燃料を買うのにも切符を発行してもらわねばならなかった。1986年、はじめてのエチオピアで、なにをするにも必要な役所のお墨付きを求めて、役所と大学を何往復もしたことが今となっては懐かしく思い出される。

しかし、役所の手続きが不便で時間がかかるだけというわけでもなかった。アジスアベバの内務省で旅行許可をもらった翌朝に出発して、600キロ離れた次の町で役所に出頭すると、きちんと確認の書類が届いていて驚かされたものだ。この国の行政システムが、警察や公安に限らず意外にきちんと機能していると思わされることは他にもよくあった。「帝国」による支配のしくみのいくつかは次の体制によって引き継がれたというか強化された部分もあったのかもしれない。

そのデルグ社会主義政権が倒された1991年の7月、私はまだ兵士達がキャンパスに駐屯していたアジスアベバ大学を訪問した。戦車の前にいる少年のような兵士が手にしている本には、MARX という名前が大きく印刷されていた。エチオピア研究所に挨拶に行くと、もう旅行許可の仕組みはなくなったといわれ、半信半疑のまま国内線の飛行機に乗ってジンカへ向かった。途中、降りたアルバミンチの空港で、エチオピア航空のパイロットと男性パーサーがやけに明るい顔をして話していたので、なにげに飛行機の写真を撮ってもよいかと尋ねた。それまでは、空港内ではカメラを出すことすら憚られた時代であったから、断られることも予期した上での申し出であった。しかし、予想に反して、撮影は次のような言葉で許可された。「撮りたまえ、自由に。もうこの国では何でも自由にできるようになったんだ！」

それから21年、今から三年半前のことになるが、この国を率いていたメレス首相が亡くなった。そのときも、偶然だが私はエチオピアにいて、それもアジスアベバからは車で一日半ほどかかる南部諸民族州の農村で訃報をきいた。その前後のエチオピアという国の様子は至って落ち着いたものだったし、3日後には村の広場で弔いの式が、在来のやり方と同時に、エチオピア正教会およびプロテスタントの作法でそれぞれおこなわれた。1991年の社会主義政権崩壊の際は、軍隊が到着するまえに旧政府関係の役人達はこぞってケニアに向けて逃げ出し、ジンカの町には自動車も1台もなくなった。それと比べるとじたいおかしなことなのかもしれないが、メレス首相の亡くなったあとも、辺境の町には平穏な日常が続いていたといえる。

その後のエチオピアでは、歴史上はじめて南部出身のセム系以外の言語を母語とする人物が国の長につき、南部の人びとにはある種の期待が高まったことも事実だろう。期待は期待として、今はただ、国のありかたとは関わりなく人びとの平安が続くことを願わずにはおられない。

(しげた まさよし/京都大学教授)